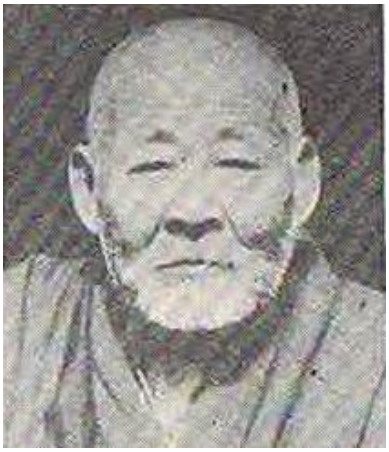
資料３－②

小牧市立としょかん　子ども郷土しりょう

その 18　小牧の郷土史家①　津田応助



皆さんは津田応助という人を知っていますか。（写真は「小牧市史」より）応助さんは、明治 23 年（1890）に生まれ、昭和 42 年（1967）に 77 歳で亡くなりました。小学校卒業後、家業の材木商を手伝っていましたが、父の死によって商売をあきらめて、学問の道に生きることを決心しました。中学校には行けませんでしたが、座っていた畳がくさるほど勉強しました。その後、大変な勉強家だと評判になり、塾を開いて、学校に行きたくても行けない若者に漢文や古典を教えました。

中国や日本の古典を学ぶ一方、「東春日井郡誌」、「小牧町史」、「愛知県史」、「木津用水史」などの編集委員をつとめ、小牧の学者、郷土史家として知られるようになりました。しかし、その人生は苦労の連続でした。お金がないので、写経（仏教のお経を写すこと）をして、きふ金を集め、自分も病気に苦しみながらも、多くの仕事をなしとげて、昭和 40 年（1965）には小牧市の文化功労者として表彰されました。

応助さんは、「なさけの学者」といわれるように、弱い人、困った人を見ると、自分の貧しさや立場を忘れ、ほうっておくことができませんでした。これは、若いころから中国の古い書物から学んで身につけた「惻隠の情」（思いやりのこころ）というものだったのです。

昭和 18 年（1943）には、織田信長公の記念碑を自宅に建て、昭和 26 年

（1951）には、名古屋の建中寺にあった尾張藩代々のお殿様の墓石がこわされそうになったので、建中寺にたのんで、小牧山に墓石をうつそうとしました。昭和 33 年（1958）に市内の老人を招待して名古屋上空を飛行機で飛行したり、昭和 34 年（1959）には、南極におきざりにされたカラフト犬をかわいそうに思い、観音像を建てたりしました。

一方で応助さんは、古い本や古文書を大切に考えて、いつか役立つようにと、一冊ずつ写しました。コピー機などありませんから、紙に筆で一文字、一文字写すのです。それらの本を保存するため自宅に「象山書庫」（写真）を建てました。その時に集めた資料は現在「象山文庫」として市立図書館に寄贈され保存されています。

これからは、応助さんのような人はあらわれないかもしれません。現代のわたしたちは、きびしい環境でも努力をつづけること、弱い立場の人に思いやりをもつこと、社会の役に立つ人になること、小牧の歴史を学び、誇りをもつこと、そういう多くのことを応助さんから学ぶことができます。

郷土の歴史を研究する人を、郷土史家といいますが、今回から３回、３人の郷土史家についてご紹介していきます。

＜参考にした図書＞　図書館でくわしく調べてみよう！

・愛知県小中学校校長会『ひびけエンジン』（愛知に輝く人々5）

・小牧市教育委員会『津田応助と象山文庫』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

編集・発行　小牧市立図書館　　平成２６年６月１日

485-0041 小牧市小牧五丁目 89 番地

電話　0568-73-9951